

---

# アルトメイディ症候群

京本 20

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルトメイディ症候群

### 【Nコード】

N1114K

### 【作者名】

京本20

### 【あらすじ】

アルトメイディ症候群・・・まだ世間に認知されていない謎の精神病

## 事例 1

「殺してやる！」

そう言っただけで目の前に現れるのは、集団の男達。

男達は、ナイフやチェーン等、武器の様なものを沢山持っている。

僕は、無残にも、いたづらに殺されてしまう。

僕は、自分が殺されていく記憶を持っている。

この記憶は、とても苦しい。

思い出してしまうと、発狂し僕は壊れてしまう。

僕が、この記憶を持ったのは、6歳の時である。

何時もの何気ない日常だった。

家で、くつろいでテレビを見ていたら、外に何か居る気配がした。

僕は、窓から外を見ようと窓を開けるのだが・・・

僕は、ここから先の記憶が無い・・・

気が付いた時には、病院のベッドの上に寝ていて、両親が泣いていた。

僕は2階の窓から落ちて、頭を強く打ちつけ、数週間、昏睡状態だったそうだ。

幸い僕は、回復して何事も無かったかのような日常生活に戻るのだが・・・

僕は、前とは、大きく変わっていた。

最初に言ったように、殺される記憶を持っているのだ。

何かに夢中になって忘れていた時は、いいのだが、退屈になったり。

怖い思いをしたとき、つい思い出してしまっ。

僕は、精神病院に通わされ治療を受けたが、一向に改善しなかった。学校に行くのもまま成らない状態で、僕は、家に引きこもるようになり、ゲームばかりしていた。

そんな日々の中で、僕は、自分に起きているもう一つの異常性に気が付いた。

テレビ等で歴史の放送を見てみると、その時代の人の心が判ってしまっことがあるのだ。。  
と、いうよりも、その時代の人が体験をした記憶を思い出してしまっという感じだ。

流石に、単なる妄想だと思ひ込み気にはしていなかつたのだが、嫌でも気にする自体が訪れる。

7歳の頃、僕は、両親に精神病院に入院させられた。

それからというもの両親には会っていない。。

仕方の無いことである。いくら家に居るといつても、ふと思ひ出す死の記憶は、

僕よりも両親をパニックにさせるのだ。

僕が発狂して壊れる姿を両親は見たくなかつたのだと思っ。

僕もその方が良いと思っ。。

自分でも、いつ、自殺を行ってしまうか判らないからだ。  
だけど、寂しい。悔しい。

僕は、両親を忘れるまでに、どれほど苦しんだのか判らない・・・

・  
・  
・

精神病院での生活が始まった。

生活というよりも半ば隔離に近い形である。

自殺の道具になりそうな、鋭利な物は一切置いてはいない。

あるのは、僕の好奇心を萎えさせないものと、監視モニターだけである。

だが、退屈は、どうやっても避けようがなかった。

僕は、暴れ、安定剤を注射されるといいう日々を送った。

3年後・・・

僕は、この病院から追い出された。

両親が事故で死んでしまったのだ。

病院に工面する金が底をついて、僕を見放した。

僕は、施設に引き取られるのだが、僕の障害は、どこにも受け入れられないので、

たらいまわしにされた。

僕は、その都度、皆の悲しむ顔を見るのに耐えられなかった。

嫌なものを見たり、悲観すると、その都度、僕は壊れてしまつから・  
・

僕は、施設を逃げ出して、遠くへ行った。

自殺をしようと、高いところを探して飛び降りた。

だが、死ねなかった。

高さが足りなかったのだ。

僕は重症だったが、死ぬには至らなかったのだ。

僕の体は、病院のベッドの上に縛り付けられた。

身動きが取れない状況である。

そんな中で、僕は、ひたすら、死ぬ記憶を思い出す。永遠に終わることのない苦しみである。

何度も発狂、嘔吐する。

だが、動けば動くほどに、僕の体の治りが遅くなる。

そして、痛みで、死を思い出すことを繰り返す。

地獄を味わい続けた・・・

・

今、思えば、これが僕を治す薬になったのかもしれない。

死の苦しみに慣れしまったのだろうか。

実際は、わからないが、死の記憶の症状は、昔ほど大げさなものではなくなっていた。

病院を退院した後、僕は、施設に引き取られることになる。

今僕は、11歳、生まれて初めて、人並みに生きれることになる。

僕は、期待に胸を膨らませる。

僕の新しい人生が今始まるのである。

アルトメイティ症候群・・・記憶の展開図日記 - 1 (前書き)

物語は前作で主人公が闘病生活を続けていた際に見続けた死の記憶の謎に迫ります。

舞台は病から開放された後の10年後、主人公は21歳です。

大人になり物事を学習した主人公は闘病生活中に見た映像や感情の記憶を思い出し日記にまとめる。

アルトメイティ症候群・・・記憶の展開図日記・1

僕は今日から日記を書く。

闘病生活の際に自分の目に映る不可解な映像とその時感じた感情を  
思い出しながら記録する。

これにより病の謎が解明されることを期待する。

X月1日

覚えているのは苦痛。

呼吸も出来ない苦痛

何が起きた判らない。

思い出そうと記憶辿ると、巨大なピラミッドが見えた。

エジプトのピラミッドだろうか。

人が沢山居てピラミッドを作っている。

太陽の光に照らされたピラミッドは光輝いている。

歴史のテレビで見たようなのと明らかに違っていた。

表面はツルツルで光沢剤が塗られたかのようにピカピカしている。

更に記憶を昔に戻すと

裕福そうな人が見える。

彼ら彼女らは、どうやらエジプト時代の王族らしい。

いあわゆるクレオパトラとかツタンカーメンだろうか。

歴史に詳しくないから良く判らないから何とも言えない。

そもそもこの現象は夢なのだろうか？

彼らは僕に話しかけてくる。



「おい！リオン！次は何して遊ぼうか？」

彼は僕のことをリオンと呼ぶ。

僕の感情はワクワクした。

理由は判らないけど、リオンという人物の感情と繋がっているのかもしれない。

リオンは彼と遊ぶ。

鬼ごっこをしているのだろうか。

実に楽しそうである。

そして僕も楽しい。

実に居心地の良い時間が感じた。

僕はリオンが感じるであろう幸福の感情を探す為に映像を思い出す。

リオンは恋をしている。

5歳年下の女の子のようだ。

女の子の歳は10歳くらいだろうか？

2人は楽しそうに会話をしている。

反面遠くで陰からこちらを見ている少年が居る。

5歳くらいの幼児である。

どうやら女の子の弟らしい。

寂しそうにこちらを見ている。

リオンは弟と女の子を誘い遊ぶ。

どうやら又も鬼ごっここの様である。

そして楽しそうである。

僕も楽しい。

もつと楽しみを探す為に記憶を探る。

リオンは女の子と一緒に椅子を作っている。

椅子は黄金に輝いている王座である。

実に楽しそうに作っているようだが、隠れて誰にも見られないように作っている。

どうやら世界に一つない、もの凄い椅子を作って両親達を驚かせる作戦らしい。

いちゃいちゃぶりは見てて呆れるほどである。

けど、リオンの感情は幸福に満たされていると言える。

そして僕も幸福に満たされている。

少し時間を先に進めると、ليونからの幸福の感覚は消えた。

どうやらリオンは若くして王の座を受け継いだようである。

母がローマへと嫁いだ為にエジプトの公務を全て任されたのである。

その心は期待と不安が交錯していた。

だが周りの家臣達に支えられ公務に意欲的になっていく。

けれど連日の公務が激務となっていきリオンは疲れ果てている。

この時のリオンからは幸福は、ほとんど消えていたが、時々、遊びに来る女の子の笑顔に励まされるようである。それが大きくリオンを支えていた。

更に時間を進めたら、リオンは泣いていた。

母が自殺したのだそうだ。

リオンは早くに父親を亡くしていたから家族が誰も居なくなった事

へ絶望していた。

だが、そんなリオンは比較的直ぐに立ち直る。  
女の子が側に居てくれたからだ。  
女の子が献身的になって励ましてくれてリオンは生きる希望を見出した。

この頃の2人は将来の結婚の約束を交すほどの親密にな関係である  
ようで、将来設計をしていた。  
より良い国を共に作っていくと誓っていた。

だが、この先の記憶から一気に苦痛に変わる。  
何がリオンに起きたのだろうか？  
全く判らない。

とにかく苦しい辛い。息ができない。  
僕はパニックになって、とにかく暴れた。

目の前に薄っすらと浮かぶ人影が見える。

男である・・・一人、二人、・・・4、5人は居るだろう。  
男達はリオンの口と鼻を押さえて窒息死させる。  
男達の正体はリオンが信頼を置いている家臣達だった。  
リオンは何も判らないまま殺されてしまう。

リオンの心中は「何で？」という一言に集約されていた。  
理不尽で理解できない死を受け入れられなかった。

この苦痛は、僕の闘病生活に酷似している。  
理不尽に死の記憶を受け入れなければならぬ。

あの感情と全く同じである。

闘病生活中、僕は何度もこの映像とリンクしてしまい窒息死を体験した。

正しく「何で？」である。

こんな苦痛を、なぜ、体験しなければならぬのかという疑問に苛まれた感情が僕とソックリであった。

不思議であるが、もしや他の記憶も同じ様に連性があるのだろうか？

この後の記憶はリオンからは完全に離れている別の人格になる訳だが、

今日は流石疲れた。やはり死の体験は一日一回が限度である。

最初に思い出した際に一度、死を体験したから一旦、記憶を思い出すのを止めとけばよかった。

けど、思い出すのも集中しなきゃいけないし途中でやめるのは、やはり面倒である、

もっと上手く記憶を思い出すのをコントロールしないと、いつまで経っても記憶の全容を記録に残すことはできない。

とりあえず今日は、リオンの幸福を収穫できたから、それを思い出しながら寝るとしよう。

x月20日

記憶を思い出す練習をしていたら、ある程度コントロールできるようになった。

少し詳細に記憶を辿ったから記録しておく。

リオンが殺される直前の行動はいつもの様にベッドで寝ていた。リオンは寝込みを襲われ息を塞がれたようである。

犯人と思われる者は恐らく家臣の中の裏切り者だろう。公務の際に拳動のオカシイ奴が明らかに存在していた。だが彼らを調べる手立ては僕に無い。

リオンは人が良すぎたのである。

知識、学問、語学に幾ら堪能でずぐれていても、

リオンは人を疑うということを全く知らなかった。

人に騙されたことが一度も無い人生を送っていたのだろう。

感情の中に負のオーラが何一つ無かった。

何もかもに恵まれて育った王子だからこそなのだろう。

恐らく政権関連の争いに巻き込まれたと思われる。

リオンは政治を動かすには若すぎたのである。

若さゆえにリオンの政治力を信頼できなかった家臣達は王を自ら殺してしまうのである。

リオンの死後、記憶から先に進むと、

思い出したのは、「何で？」という疑問の感情だった。

その疑問の感情は、とても理不尽になもので、親に捨てられ見捨てられた様な感覚であった。

そしてリオンの時の「何で殺されたか？」訳が判らないパニック状態の感情に酷似している気がする。

気付くと前が見えなかった。

感情とリンクした相手は、涙を流していて、前を見ていない。感情が負しかなく何も把握できそうにないので、すこし、記憶を戻す。

目の前には、女が居る。

女は、どうやら母である。

そして僕がリンクしているのは、その息子のようである。

母は、息子を天皇にする為に寺に預けるらしい。

息子は、それが嫌で負の感情になる。

「何で？どうして？」という疑問と虚無感が息子の中の感情を埋め尽くしていた。

息子の名前は菊地丸であった。

僕は、菊地丸という名を知っていた。

歴史上の一休という人の本名が菊地丸であった。

歴史は苦手だったけど、一休さんのアニメが面白くて良くみてたから覚えている。

たしか、アニメでは、一休さんは、寺に預けられて、頼知を駆使して、

面白オカシイ日々を送るのであるが・・・

でも、この記憶ではチョットちがうな。

はじめこそ、アニメな感じであるが、成長するに従って頼知能力で人を

言い負かし始めて、トラブルを起こし、孤立していった。

仲間に罵倒され居場所は失った一休は、寺を出て行き、尊敬する師

匠の下へ行く。

だが、その師匠は死んでしまい。居場所を失った一休は生きる望みを失った。

天皇になる為の僧侶の道だったが、一人ぼっちになった一休は孤独に耐えられず

母の元へすがつていて行くも・・・一人前の僧侶になってないからという理由で会わせて貰えない。

「天皇なんてクソくらえ！俺は母の道具じゃない！

死んでやる。困らせてやる。そうすればきっと、優しくしてもらえるかもしれない・・・

そうして、一休は自殺をしようとした。

今日、僕は自殺の寸前まで記録できた。

一休が琵琶湖に身を投げようとしていた所で回想を止めた。

水死、呼吸困難か・・・

アレはキツイから避けられて良かった・・・

リオンの時の様に突然、襲われたら、僕はパニックになって記憶から脱出できない。

今回は避けられて良かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1114k/>

---

アルトメイディ症候群

2011年1月16日07時29分発行